よくわかるキリスト教講座　　2006.10.19

芦名　定道

中身から学ぶキリスト教

第２回　キリスト教の宗派・教派

── 宗派・教派から学ぶキリスト教の多様性 ──

（１）前回－信仰告白における教会・聖書における教会－

１．使徒信条：「わたしは聖霊を信じます。きよい公同の教会、聖徒の交わり」

２．コロサイの信徒への手紙

2:19　頭であるキリストにしっかりと付いていないのです。この頭の働きにより、体全体は、節と節、筋と筋とによって支えられ、結び合わされ、神に育てられて成長してゆくのです。

３．ポイント

・キリストを頭とした生きた体（有機体）・全体と部分　→　役割の多様性と統一性

・霊的一致

・歴史を貫いて全人類的な規模で存在する「公同の教会」と、個々の具体的な諸教会（各個教会）とのつながり。見える教会・見えざる教会。

（２）教派の多元性をめぐるキリスト教史

４．原始キリスト教における多様性

弟子集団の複数性、多様な伝道者・伝道活動

東回りの伝播経路：正教会群

アフリカ、中央アジア、南アジア

５．教会の制度化あるいは国教化以降

正統と異端、教会の分裂（東方教会と西方教会）

６．宗教改革と宗教戦争　→　プロテスタントとカトリックの対立構造に規定された時代

カトリック教会からプロテスタント諸教派の分離

プロテスタント諸教派の急速な多様化

７．エキュメニズム（教会一致運動）の進展

公同の教会の回復に向けて

第二バチカン公会議とＷＣＣ（世界教会協議会）

多様性・多元性のもたらす対立・闘争を超えて、世俗世界とも共有できる新しい秩序の構築へ。

８．教派の多様性・多元性は必ずしもわるいことではない。むしろ、キリスト教は、最初から常に多元的だったのである。多様性における一致としての霊的一致。

９．言葉の多様性と一致のヴィジョン
＜創世記＞
10:1　ノアの息子、セム、ハム、ヤフェトの系図は次のとおりである。洪水の後、彼らに息子が生まれた。2 ヤフェトの子孫はゴメル、マゴグ、メディア、ヤワン、トバル、メシェク、ティラスであった。3 ゴメルの子孫は、アシュケナズ、リファト、トガルマであった。4 ヤワンの子孫は、エリシャ、タルシシュ、キティム、ロダニムであった。5 海沿いの国々は、彼らから出て、それぞれの地に、その言語、氏族、民族に従って住むようになった。
10:32　ノアの子孫である諸氏族を、民族ごとの系図にまとめると以上のようになる。地上の諸民族は洪水の後、彼らから分かれ出た。
11:1 世界中は同じ言葉を使って、同じように話していた。2 東の方から移動してきた人々は、シンアルの地に平野を見つけ、そこに住み着いた。3　彼らは、「れんがを作り、それをよく焼こう」と話し合った。石の代わりにれんがを、しっくいの代わりにアスファルトを用いた。4　彼らは、「さあ、天まで届く塔のある町を建て、有名になろう。そして、全地に散らされることのないようにしよう」と言った。5 主は降って来て、人の子らが建てた、塔のあるこの町を見て、6　言われた。「彼らは一つの民で、皆一つの言葉を話しているから、このようなことをし始めたのだ。これでは、彼らが何を企てても、妨げることはできない。7 我々は降って行って、直ちに彼らの言葉を混乱させ、互いの言葉が聞き分けられぬようにしてしまおう。」8　主は彼らをそこから全地に散らされたので、彼らはこの町の建設をやめた。9 こういうわけで、この町の名はバベルと呼ばれた。主がそこで全地の言葉を混乱（バラル）させ、また、主がそこから彼らを全地に散らされたからである。

＜使徒言行論＞
2:1 五旬祭の日が来て、一同が一つになって集まっていると、2 突然、激しい風が吹いて来るような音が天から聞こえ、彼らが座っていた家中に響いた。3 そして、炎のような舌が分かれ分かれに現れ、一人一人の上にとどまった。4 すると、一同は聖霊に満たされ、“霊”が語らせるままに、ほかの国々の言葉で話しだした。5 さて、エルサレムには天下のあらゆる国から帰って来た、信心深いユダヤ人が住んでいたが、6 この物音に大勢の人が集まって来た。そして、だれもかれも、自分の故郷の言葉が話されているのを聞いて、あっけにとられてしまった。

（３）なぜ、キリスト教は多様なのか
10. 多様性・多元性の理由・原因１
　「人間的な愛」（ボンヘッファー）

11. 多様性・多元性の理由・原因２
　人間（個人と共同体）の多様性へ適切に応じるために、公同の教会は自らを複数化し

た。

＜ガラテヤの信徒への手紙＞
2:7 それどころか、彼らは、ペトロには割礼を受けた人々に対する福音が任されたように、わたしには割礼を受けていない人々に対する福音が任されていることを知りました。
2:8 割礼を受けた人々に対する使徒としての任務のためにペトロに働きかけた方は、異邦人に対する使徒としての任務のためにわたしにも働きかけられたのです。

12. 日本教会の自立という問題意識

（４）特定の教派・教会につながることの意味
13. どの教派、どの教会でもよいのか。

14. 宗教多元性の市場経済モデル
　顧客をめぐる宗教間の自由競争
　個人の自由選択

15. どの教派、どの教会につながるかは、「運命的」
　運命と自由

16. 自分が他者にとって運命となること
　信仰は個人の決断であるが、外部からの強い促しもそこに作用している。
　愛する他者に最良のものを提供したいという気持ち。
　家の宗教と個人の宗教のあれかこれかを超えること。

17. 神は「土の器」を通して働く。
＜Ⅱコリント＞
4.7　ところで、わたしたちは、このような宝を土の器に納めています。この並外れて偉大な力が神のものであって、わたしたちから出たものでないことが明らかになるために。

＜文献＞
１．『世界キリスト教百科事典』（第一版）教文館
Barrett, Kurian, Johnson（eds.）, *World Christian Encyclopedia*. vol.1-2, second edition
Oxford University Press　2001.
２．畠山保男「エキュメニズムにおけるキリスト論と贖罪論」、
熊澤義宣・野呂芳男編『総説　現代神学』日本基督教団出版局
３．ＮＣＣ宗教研究所双書『宗教観の対話と共生のために――エキュメニカルな指針』
新教出版社